リクルート帝王の白日夢

佐木隆三

リクルート帝王の白日夢

佐木隆三

リクルート帝王の白日夢
著者—佐木隆三　発行者—清水文人
発行所　株式会社双葉社　東京都新宿区東五軒町三—二八　郵便番号一六二
電話東京（〇三）五二六一—四八一八（営業）
（〇三）五二六一—四八三三（編集）
振替・東京　八—一一七二九九
印刷所—株式会社享有堂印刷　製本所—株式会社星野製本
落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします。
定価・発行日はカバーに表示してあります。
©佐木隆三　一九八九年　Printed in Japan

ISBN4-575-28071-2 C0095

リクルート帝王の白日夢——目次

第一章　問われる創業者の責任　5
第二章　安比リゾート疑惑　33
第三章　錬金術師の社員操縦法　66
第四章　江副逮捕！　賄路天国の末路　93

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

第五章　〝地本主義者〟への道　121
第六章　人間不信の原風景　147
第七章　「巨悪」は逃れた　170
第八章　リクルート帝王の白日夢　194
あとがき　209

装幀　ヴァンケット
カバー写真　大森幸代

第一章　問われる創業者の責任

一九八八年十一月二十一日午前十時、衆議院リクルート問題調査特別委員会の証人として、江副浩正が出頭した。

六月十八日付『朝日新聞』が、川崎市助役へのリクルートコスモス未公開株譲渡を報じてから、まったく表に出ていない。十月十二日、税制問題等調査特別委員会が参考人として質問したのは、半蔵門病院を訪ねてのことだ。この病床質問で、未公開株の譲渡先については、「名前を発表するぐらいなら、私が自滅したほうがいい、刑事罰を受けても言えない」と、固く口を閉ざした。

しかし十一月十五日、衆議院にリクルート特別委が発足して、江副浩正、高石邦男（前文部次官）、加藤孝（前労働次官）の三人を、証人喚問することを決定した。十日に税制改革関連六法案が強行採決され、紛糾を続けた国会で妥協の糸口として、リクルートコスモス株譲渡リスト公表を自民党が約束したのだ。十五日午後九時三十分、国会から資料提出を要求されたリクルート側は、リクルートと

リクルートコスモスの社長が連名で、「政・官界の関係者はすべて明記した」と、譲渡先リストを提出したのである。

十一月十八日、リストの中の「二万株＝会社役員」が、八四年十二月の譲渡の時点で田中角栄秘書だった早坂茂三と判明した。「国会がナメられた」と信憑性が問題化し、証人に対する尋問を拒まれていた社会・共産の両党は、〝疑惑隠し〟騒ぎを通じてリクルート委員会に参加することになった。

こうして二十一日を迎え、二時間にわたり与・野党委員が尋問する運びなのだ。

「あなたは江副浩正君ですか？」

「江副浩正です」

「生年月日、住所、職業は？」

「昭和十一年六月十二日生まれ、東京都港区南麻布三の一一。株式会社リクルートの取締役相談役です」

国会の証人喚問は、ダグラス・グラマン事件以来、九年ぶりである。その前のロッキード事件でも、証言の模様はテレビ中継されたが、今回はテレビ映像が禁止されている。

ＮＨＫテレビは、小腰をかがめた江副の静止画像を映して、尋問の音声を流した。宣誓書を朗読する瞬間から、カメラは一切、証人に向けてはならない。

最初に原田憲委員長（自民）が、総合的な尋問をした。

「あなたは、公開前のリクルート株の譲渡先として、どのような目的と基準で、高石文部事務官と加藤労働事務次官に決めたか？」

「高石氏、加藤氏とも、約十年このかた親交を結ばせて頂いており、そんなことからお子様の結婚式にも出席いたしました。この親交の中で、株を取得して頂きましたが、今となってはお立場を考えず、深く反省するところでございます」

「十月十二日の臨床質問では、コスモス株の決算対策のためと答えていますが？」

「えー、あのぉ、昭和五十九年十二月末には、リクルートがその年度に、新しい仕事を開始いたしまして、営業収益も対前年比では大変苦しい状態にあったということ、かたがた同じ年度に、日本軽金属の旧本社ビルを取得させて頂いたことから、営業収支も前年度に比べて悪化した、と。こういうふうな事情がございまして、何か資産の売却益で以て辻褄を合わさなければ減益になることから、リクルートコスモス社の株式の売却を決めたような次第でございます」

響きの良い声が、はにかんだようなテレビ画像の顔に重なる。ロッキード、ダグラス・グラマン両事件では、延べ三十一人（国会議員以外）が喚問されたが、これほど落ち着いて、時に苦笑したりする証人はいなかった。

「江副さんは今日、おそらく最後まで、肝心なことを話さないだろう」

テレビの前で、一人の男が呟いた。

一九六〇年四月、東大の教育学部教育心理学科を卒業したばかりの江副浩正は、「大学新聞広報社」を創業した。個人営業で社員は江副をふくめて三人、全国の大学新聞に広告を斡旋する仕事だった。六〇年十月、資本金六十万円の株式会社にして、社名を「大学広告」に改めたが、創業から二年間は

社員三人だった。他はすべて、アルバイトでまかなった。

テレビの前の男は、創業期から江副の側で仕事をしてきた。今は袂を分ったが、その私生活まで熟知している。

「身長一六五センチで細い体つき、一見してひ弱そうだが、なかなか芯が強く、したたかな人物ですよ。何といっても、創業者ですからねぇ」

一九三六年六月、江副浩正は大阪市天王寺区で生まれた。父良之、母マス子の長男だった。

父親は佐賀市の出身で、佐賀中学から九州帝国大学併設の臨時教員養成所に進み、数学・物理の教員になった。初任地は愛媛県の今治実科高等女学校で、長野県の飯山中学校を経て大阪へ出た。一九三二年、大阪大丸デパート勤務のマス子と結婚した。今治時代の教え子で、同窓生がデパートへ良之を連れて行き、その再会が結婚のきっかけだった。二人の間に、女の子が生まれたが、半年後に肺炎で死んだ。そして二年後に、浩正が生まれたのである。しかし三歳のとき、両親は離婚する。長身でモダンボーイの父親が、ダンスホール通いを続けて、ダンサーと親しくなり過ぎたのが原因という。

江副家の長男だから、父親が引き取った。三歳の浩正は佐賀市の祖父に預けられ、父親がダンサーと再婚して、大阪に連れ戻された。教育者の父親は、厳しく躾けた。〝葉隠れ精神〟について語り、ケンカして泣いて帰ると、「涙を見せるものではない」と、家に入れなかった。しかし一人息子が、レコードに合わせてダンスの真似をすると、「音感がいいから、将来は音楽家になるかもしれない」と、相好を崩した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

一九四三年、天王寺区の小学校に入学したが、戦災で家が焼失した。ふたたび佐賀の祖父に預けられ、四年生の一学期まで地元の小学校に通った。

四六年九月、大阪府豊中市の小学校に転校した。末広町の借家から克明小学校に通い、四九年四月、私立甲南学園中学に進む。甲南学園は〝坊ちゃん学校〟で、資産家の子が多い。父親が教員の江副は経済環境では一番下のグループで、ほとんど目立つことがなく、ニコニコ笑って人の話の聞き役だった。

中学時代に、父親が離婚した。一九〇三（明治三十六）年生まれの父親は、若い頃から女性関係が派手で、四十代になっても衰えることがなかった。二番目の妻とは、〝愛人〟を巡るトラブルで別れ、デパート勤務の女性が三番目の妻だった。

五二年四月、甲南学園高校に進んで新聞部に入る。しかし、温和しくて怒った顔を見せず、ニックネームが〝おじん〟の江副は、編集部でも影のような存在で、積極的に活躍した形跡はない。

この頃、化学班にも入って、実験室で一人で実験するのが好きだった。小学校のころから化学者になりたいと思い、ナイロンの発明者カローザフについて書いたものを読んだりした。

学業成績は、際立って良いほうではなかった。秀才タイプではなく、コツコツ積み上げる勉強ぶりである。第一外国語にドイツ語を選択したのは、大学受験を有利にするためという。

五五年春、ストレートで東大文Ⅲ（文学部・教育学部）に合格した。将来を問われて十八歳の江副は、「教師になりたい」と答えた。

専攻については、後に理由を語っている。

「高校生の頃から、自分の内向的な性格を、何とか改造したかった。それで学科は、教育学部の教育心理学科を選んだ。文学部の心理学科は、実験心理学が中心だが、教育心理学は、性格心理が中心だから……。むろん一義的には、教育者になるためです」

父親のように教師になるつもりでいたのに、〝ニッポン株式会社の人事部長〟と異名を取るに至る契機は、大学二年の終わりに、駒場のアルバイト委員会の掲示板で見た張り紙だった。

――編集部員・業務部員募集

東京大学学生新聞

四ページの週刊新聞を、編集部門十人、業務部門四人のスタッフで発行している。説明を聞くと、編集は手当て三千円、業務は歩合給で約一万円という。

本郷に行った江副は、第二学生食堂の二階にある事務所で切り出した。

「業務部門に応募したいのですが……」

小学校教員の初任給が、八千円の時代である。一万円は悪くはないが、新聞の販売と広告料の歩合給で、ほとんど専従なのだ。これまで東大生が、業務部門で働いたことはない。社会人や他の大学の夜学生が、この仕事をしていた。

「キミ、主に広告取りだよ」

「分かっています」

学帽に学生服の江副は、自信ありげな口振りだ。大阪の父親からわずかな仕送りしかなく、一万円のアルバイトに飛びついたのだから、引き下がれなかったのだ。

一九五七年四月、教育学部三年生になった江副は、『東京大学学生新聞』で働きはじめた。

この時期、新聞は実売五百部ぐらいだった。広告は書籍が中心で、近所の喫茶店、食堂、映画館などの広告は〝雑品〟と称していた。書籍の広告は、東京弘報堂という広告代理店が取り仕切っており、飛び込みで出版社に行っても、取れる見込みはなかった。四月は予備校の入学祝賀広告、五月祭は喫茶店などの祝儀広告で凌いだ。

折りも折り、東京大学学生新聞は、営業不振で倒産した。肝心の新聞が売れず、新たに広告が取れなければ、紙面の体裁を整えるために、以前の書籍広告を無料で載せていた。

サークルの仕事だから、やむを得ない面もあった。だからといって、『帝大新聞』時代からの伝統を、断ち切るわけにもいかない。OBが再建に乗り出し、財団法人・東京大学新聞と改め、経営者を送り込んだ。新生の東京大学新聞では『東大紳士録』を発行して、江副も先輩を訪ねて売り歩き、『東京大学新聞』に企業の付き合い広告を貰った。

大阪に帰省した際には、製薬会社から頭痛薬の広告を取るなど、黙々と営業マンに徹して、〝雑品広告〟は次第に増えていく。

一九五八年六月、本郷キャンパスの掲示板に、企業の会社説明会の案内が貼られ始めた。そして『東京大学新聞』の片隅に、初めて八センチ角の就職広告が載るのである。

――輸出入・国内販売　丸紅飯田株式会社説明会御案内

この二段広告が、〝ニッポン株式会社人事部長　江副浩正〟の原点だった。丸紅が高島屋飯田（高島屋の貿易部門が独立した会社）を合併して、総合商社としてスタートして間もない時期だ。

「新しい会社だから、学生に対して積極的にＰＲなさったほうが宜しいのでは？」

学帽に学生服の江副は、会社の人事部を訪ねて切り出した。それまでは企業の宣伝部、総務部しか行ったことがないが、企業の説明会の季節だから、思いついて就職広告を取りに、人事部に行ったのだ。

「こんな広告の話は、今まで聞いたことがない」

「また来ますから、考えてみて頂けませんでしょうか？」

ペコリと頭を下げて、小柄な学生は帰った。広告料金は数千円で、たいしたことはない。次に来たとき、丸紅飯田の人事担当者は承知した。

一回載せると、後は広告取りが楽になった。

「こういう広告を、お願い出来ませんでしょうか？」

広告取りに出向くとき、江副は必ず学生服だった。それまでの業務部員は、くたびれた中年男や、生気のない夜学生で、「東大新聞に広告を出して下さい」と回っていた。しかし江副は、自分が東大生であることを、セールスポイントにしたのだ。丸紅飯田に続いて、次の号では十二社が、「説明会御案内」の広告を出した。超大手はプライドがあってか、大き目の名刺広告を十社が出した。

この五八年五月、ＮＨＫのテレビ受信契約台数は、百万を突破した。それまで電気洗濯機、電気冷

蔵庫、電気掃除機が〝三種の神器〟とされていた。このうち電気掃除機が、テレビと入れ代わった。

一九五六年からの〝神武景気〟は、輸入の増大で国際収支のバランスを崩し、五七年三月、五月と二回にわたる公定歩合の引上げで、株式相場は暴落して、〝鍋底景気〟に入っていた。しかし、五八年は家電ブームなどで、六月を底にV字型に回復したのだ。

五八年九月から、『東京大学新聞』の広告欄に、「各社の求人」シリーズが始まる。広告を出す会社は、社名を載せるだけではPR効果がないから、業務内容を紹介して、いかに将来性のある企業かをアッピールしたい。そのためにスペースが必要であり、広告欄はどんどん拡大していった。四ページの紙面が八ページになり、十二ページ、十六ページと増大していった。

広告収入は飛躍的に増えたが、比例して記事も増やさねばならない。五八年六月に発足した第二次岸信介内閣は、十月初めに「警察官職務執行法」の改正案を上程した。①職務質問、②保護、③警告と制止、④立ち入り等、警察官の権限を拡大して取締りを強化するもので、反対運動は全国的に高まった。

学者・文化人が積極的に発言して、東大の学生たちは、大がかりな街頭デモを行った。『東京大学新聞』においても、筆鋒鋭い論陣を張っている。

「広告を出せば、左翼学生の資金源になるのでは？」

業務部員の江副は、会社の窓口で厭味を言われて弁明した。

「財団法人としてちゃんとした経営者が居ますから、そんなことはありません。ボク自身は活動したことがないし、純粋にキャンパス新聞に徹するべきだと主張しているんですが、編集部の連中が、な

かなか受け入れないんです」

東大教育学部は、〝民主教育の牙城〟と言われて、学生の動きは活発だった。五八年三月に教育課程審議会は、「小・中学校で道徳教育の実施をふくめて全体的に改善する」と、文部省に答申した。紀元節復活の動きもあり、「勤務評定に反対して民主教育を守る」と、日教組は激しい闘争を展開していた。主な教授は、日教組講師団の中心である。しかし、後に教育課程審議委員になる江副は、このころ何の関心も示さず、広告取りに熱意を燃やしていた。

業務部員は歩合給で、書籍以外の広告取りは、実質的に江副一人が担っていた。歩合は広告料の二五%であり、平均して月に三〜四万円の収入になった。求人の季節に限らず、年間を通して何回も広告を出す会社があった。

一九五九年になると、〝神武景気〟を上回る〝岩戸景気〟が訪れ、景気上昇は六一年十二月まで続く。江副の収入はますます増えて、十万円を超えるようになった。冬はスキー場で過ごし、夏は温泉場にリュックサックに本を詰め込んで行った。もっぱら教育関係の本を読んで、文学書の類には関心を示さない。

本郷森川町のアパートに下宿して、訪ねてきた学生仲間と、酒盛りをすることがあった。カネ回りがいいから、いつも江副の奢りである。サービス精神が旺盛でニコニコして、口角泡を飛ばすような議論を嫌った。

「東大新聞の連中は、侃々諤々やるばかりで、下らないから付き合わないことにしている」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo